

アイン・ランドの思想と『肩をすくめるアトラス』

藤 森 かよこ

要旨

1930年代ニューディール (New Deal) 政策の社会主義的、統制経済的政策は、アメリカ精神の劣化をもたらしたと考えた人々は、アメリカのソ連化を阻止するべく結集し、保守主義陣営を結成した。彼らは、ソ連からの亡命者アイン・ランドの作品がアメリカ的価値観や自由放任資本主義を祝福するものであったので、彼女を大いに歓迎した。しかし、それもランドが1957年に『肩をすくめるアトラス』(Atlas Shrugged)を発表するまでのことだった。

アイン・ランドをアメリカの主流保守言論界から追放し、かつ文化左翼リベラル系知識人をしてランドを蛇蝎視させることになった『肩をすくめるアトラス』は、アイン・ランドが「客観主義」と名づけた哲学を基礎としている。「客観主義」は、形而上学的には客観的現実 (Objective Reality)、認識論的には理性 (Reason)、倫理的には自己利益 (Self-interest)、政治的には自由放任資本主義 (Laissez-faire Capitalism) の立場を採る。

ランドは、地上のことは、人間の有能さと努力と創意工夫が解決するべきものであり、人間に責任があることを指摘した。その意味での人間の英雄性を肯定し、無神論を支持した。また、利他主義の欺瞞性を指摘し、個人の長期的視野に基づいた徹底した利己主義の発露こそが、個人の集積である社会に平和と秩序をもたらすと主張し、その文脈から自由放任資本主義を唯一の道徳的体制として支持した。『肩をすくめるアトラス』は、出版以来、アメリカの草の根の国民文学であり続けている。

キーワード：客観主義、理性、利己主義、利他主義、資本主義

1. はじめに

筆者の目的は、アメリカの政治思想史におけるアイン・ランドの布置 (機能) を明らかにすると同時に、日本人にとってのアイン・ランドの意義を提示することにある。そのための作業のひとつとして、アメリカの保守主義とリバータリアニズムとアイン・ランドの思想の関係を整理・確認する必要がある。

ソ連からの亡命者でありながら、アメリカにおいて作家・大衆思想家 (pop-philosopher) になったアイン・ランド (Ayn Rand:1905-82) の人生の軌跡と、第二次世界大戦後のアメリカにおいて、彼女が主流

保守言論界に一角をしめていく経緯については、すでに詳しく論じた (藤森, 2012)。

次の段階として、『肩をすくめるアトラス』(Atlas Shrugged)について整理しなければならない。この小説は、アイン・ランドをアメリカの国民作家としたが、同時に、アメリカの主流保守言論界から彼女が追放される契機となった。かつ文化左翼リベラル系知識人をしてランドを蛇蝎視させることになった。そのような毀誉褒貶の激しい『肩をすくめるアトラス』と、その物語世界を支える「客観主義」と名づけられたアイン・ランドの哲学について確認することが本論の目的である。

「客観主義」は、形而上学的には客観的

現実 (Objective Reality) , 認識論的には理性 (Reason) , 倫理的には自己利益 (Self-interest) , 政治的には自由放任資本主義 (Laissez-faire Capitalism) の立場を採る。まずは、『肩をすくめるアトラス』の物語内容を確認し、次に、「アメリカの国民文学」となった、この大長編小説の多層性を指摘し、そこに貫徹しているランドの思想を明示する。

2. 『肩をすくめるアトラス』の物語内容

1991年に、アメリカ議会図書館 (The Library of Congress) とブック・オブ・ザ・マンズ・クラブ (the Book-of-the-Month Club) は、共同で「あなたが人生で最も影響を受けた本」の読者 (ビジネスマン対象) 調査をした。第1位が聖書だったのは不思議ではないが、第2位は、『肩をすくめるアトラス』だった。1998年には、有名出版社ランダムハウス/モダンライブラリーが、「英語で書かれた20世紀の小説ベスト100」の一般読者投票結果を発表したが、ランドの小説は、第1位と2位と7位と8位を占めた。第1位に選ばれたのが、この『肩をすくめるアトラス』だった。

近年には、出版発表以来何度も試みられたが成就しなかった映画化が実現し、2011年4月に *Atlas Shrugged Part 1* が上映された。2012年10月には、Part 2 が発表される予定である。このように、『肩をすくめるアトラス』とは、大学の英文科 (アメリカならば国文科) のテキストとして取り上げられることはないが、出版以来、アメリカの「国民文学」として読まれ続けてきている。

この小説の表題のアトラスとは、言うまでもなく、ギリシア神話の天球を支える巨人アトラスである。アイン・ランドの生まれ故郷であるロシアのサント・ペテルブルクでは、いたるところに「アトラス」の彫像を見ることができる。代表的なものが、エルミタージュ博物館の入り口のひとつを支える何人もの「アトラスたち」である。外壁の装飾として、屋根を支えるアトラス像が使用される様式

は、この古都の建造物の特徴である。なかには女性のアトラス像もある。ランドにとっては、建物を支えるアトラス、ひいては世界を支えるアトラスの形象は、幼いころより親しいものであった。

この小説は、要するに、この世界の政治や経済や文化を支えている頭脳と才能と責任感を持った人間が、彼らや彼女らの能力に依存し、それを搾取する人々に自分たちを搾取させるがままにしないで、「ストライキ」を始めたら、この世界はどうなるか、つまりこの世界を支えるアトラスのような人々が「もうやめた」とばかりに「肩をすくめる」ならば、この世界はどうなるか? ということを描いている。

『肩をすくめるアトラス』は、ペーパーバック版でも1063ページある長編小説であり、プロットも複雑で登場人物も非常に多い。ヒーローと目される登場人物でさえ4人もいる。この小説が、「ジョン・ゴルトって誰?」 (“Who is John Galt?”) という文で始められているように、この小説を堆進する主要プロットは、ヒロインのダグニー・タッグアート (Dagny Taggart) が、このジョン・ゴルトが誰なのか、何を目論んでいるのかを追求する謎解きである。時代は具体的に設定されていない。便宜上、ヒロインを中心にプロットを以下のように要約してみる。

ダグニー・タッグアートは、無一文から祖父が設立し発展させたアメリカ屈指の大鉄道会社「タッグアート大陸横断鉄道」 (Taggart Transcontinental Railroad) (以後TTRと記す) の鉄道運行部門担当副社長である。34歳の若さながら、無能な社長の39歳の兄ジム (James Taggart) を歯牙にもかけず、大鉄道会社を運営する。少女時代から、彼女とTTRは一体だった。この鉄道会社は、彼女にとっては、人間の可能性と有能さと責任の象徴だった。少女時代は、毎夏を過ごすハドソン河渓谷沿いの別荘近くにあるTTRの駅において、創業者の孫娘という立場を秘して、夜勤電話番をアルバイトで勤めた。彼女は鉄道の全てを熟知したかった。だから、大学でも工学を学んだ。

最近、彼女は、銀行家や音楽家や法律家から鉄道技師まで、どの分野においても、優秀な責任感ある人材に限って、唐突に仕事を辞めて失踪することが多くなっていることに気がついている。そのために、物資の納期が守られなくなっている。工事が進展しなくなっている。鉄道の安全な管理など、文明社会を円滑に動かすもろもろのシステムが正常に機能しなくなっている。

それに加えて、ダグニーが危惧しているのが、政府の政策だった。ダグニーは、人間の創意工夫と努力を促す自由競争による社会の発展を信じている。政府は、自由競争を排し、発明家や産業家や労働者が努力と頭脳で獲得した利益を国家が収集し、管理し、それらを「必要に応じて」国民に分配し、国民みなで繁栄できる「協同的共生社会」を実現するという大義名分を掲げている。しかし、この大義名分は「口実」でしかなかった。

なぜならば、新しい起業家たちや、進取の気性に富む企業家たちとの自由競争を脅威と感ずるある種の資本家たちが、政府を動かして、自分たちの地位が安泰であるようなシステムを作り、競争相手を排除するために、「協同的共生社会」を作ろうとしていたからだった。そのために、彼らが政府に採らせた政策は、次のようなものである。

まずは、弱肉強食の企業間競争を排するという大義名分のもとに、新製品を発明して売り出すことや、新事業を開拓することを制限する「反競争法」(Anti-Dog-Eat-Dog Rule)を施行させた。優れた製品やサービスを提供できる企業は、市場を独占することになり、結果的に公共の福祉に反することになるので制しなければならないと言ひ募り、すべての会社にとって規模に応じて必要な利益が得られるようにする「機会均等法」(Equalization of Opportunity Bill)を実施させた。企業間競争を排して企業風土を安定させるには、労働者や従業員の他企業への移動や労働市場の活性化も抑止することが必要であるので、離職や転職や解雇を禁じる「10-289号指令」(Directive 10-289)も発令させた。「職業の選択の自由」を無視する暴挙が議会を通過してしまった。

ダグニーの兄ジェームズは、自分の無能さを思い知らせる有能な産業家、企業家たちへの嫉妬から、これら資本家集団と政府の陰謀に加担する。彼は自分が享乐的に怠惰に生きて、社長の地位と富が保証されればいいと考えるだけの卑劣な人間である。しかし、口では「最大多数の人々の幸福の実現が正義」だと唱える。

これらの政策のために、アメリカの産業は健全な競争力を失う。優秀な人材が市場に還流せず、次第に衰退していく。職業の選択の自由をなくした労働者は労働意欲を喪失する。そうこうするうちに、前からの現象であった「人材の失踪」に拍車がかかり、TTRを含めたどの産業も、どの商業分野にも、無責任と責任転嫁と無能と投げやりな人々のみが残される。

社会の停滞と不安と増していく混乱の中で、人々の間には、答えようもない問題には“Who is John Galt?”と言う奇妙な習慣が、できあがる。ダグニーは、そのジョン・ゴルトこそ、社会から有能な人材をどこかへ流出させる「破壊者」だと考える。ダグニーは、その破壊者から自分の鉄道会社を守らなければならないと思う。最後までその破壊者と闘うことを決意する。

休暇の旅行中にダグニーは、廃業された大自動車工場の廃墟に、たまたま立ち寄り。そこで、打ち捨てられたモーターの残骸を見て驚愕する。工学を専攻したダグニーには、その残骸は、現行の輸送機関の問題をすべて解決できるような前代未聞の画期的モーターの完成品が故意に破壊されたものとわかる。その未来を開くモーターの設計者をつきとめるために、ダグニーは調査を重ねるが、その設計者はわからない。

実は、そのモーターの設計者こそ、ジョン・ゴルトだった。勤めていた大自動車会社が売却されたとき、新しい経営者が「能力に応じて働き、必要に応じて収入を得る」システムを導入して、理想的な共同社会としての新しい企業を作りたいと発表した時に、彼は会社を辞めた。自分が設計して完成させたモーターを破壊して失踪した。なぜならば、そのようなシステムを採る企業の経営が成り立つはずは

ないし、それは人間性への冒涇だと考えたからだ。収入は労働量や功績ではなく、家族数などの必要に応じて分配され、それも労働者の投票で決定されるという方式を採用したこの会社では、以下のような現象が生じた。怠惰な者は収入が保証されているので一層に怠惰になり、無能な者は無能であることに開き直り、故意の怠慢が広がった。だから、能力のある者は労働過剰になるばかりだった。労働者の士気は壊滅した。有能な者の辞職が相次いだ。また、同僚の結婚や出産は、自分の収入の減少につながるから、労働者間の嫉妬反目は増大した。従業員は息の詰まるような相互監視状態に陥り、労働環境は悪化し、工場の生産性を激減させた。この自動車会社は、ゴールトが早々と予測したように倒産した。

そのうち、自分の勤務先に見切りをつけることができる見識と勇気を持ったゴールトについての噂が、“Who is John Galt?”という流行り言葉を生んだ。「ジョン・ゴールトって誰？」→「知らない」→「答えのわからないことを言うなよ。わかるはずがない」と、意味が変化して、人々は、自分に理解できない状況に対して、「ジョン・ゴールトって誰？」と言うようになったのだ。

ともかくジョン・ゴールトは、有能な人間の能力を搾取して生きようとする寄生虫の人々に汚染されていく現行の社会への期待や希望をいっさい捨てた。そして大学時代からの親友や賛同者を募り、コロラド山中に新しい社会を建設した。この新世界は「ゴールト峡谷」(Galt's Gulch)と呼ばれた。この別天地、新世界が必要とする電力すべてが、ジョン・ゴールトが発明した永久運動モーターによって生み出されていた。

ゴールトたちは、この新世界にふさわしい人物を救出するために、「旧世界」では人目につかない労働に従事しながら、秘密裏に活動していた。ゴールトは、10年以上もダグニーの鉄道会社の下級労働者をしながら、いずれダグニーをも「新世界」に誘うつもりで彼女の行動を監視していた。真相を知って驚くダグニーだが、祖父から伝わる鉄道会社を見捨てるわけにはいかない。

社会はさらに停滞し、混乱する。物資の輸送や交

通がマヒする。農産物や工業製品も生産量が減少し、かつ生産地から消費地である都会までの物流も機能しなくなった。電力などエネルギー資源の管理、利用システムも壊滅しつつあった。

ゴールトはラジオ放送を通じて、新世界樹立の必要性と旧世界の搾取的構造を全米に伝えた。彼と彼の仲間の大義を国民に伝えた。政府はあわてるが、混乱した社会に秩序をもたらすことができる人材は、すでにゴールトたちが設立した世界に去ってしまい、政府機関はどこも機能しない。政府は、ゴールトと妥協を図ろうとする。しかし、ゴールトはその取引に応じない。政府機関は彼を逮捕し、拷問にかける。ダグニーや「新世界」の仲間たちは、ゴールトを救出する。ダグニーも、ついに旧世界に絶望し、彼らと行動をともにすることになる。

社会が文明社会であるための必要条件である基本的インフラやシステムが機能不全になり、社会混乱は一層に拡大した。その收拾をつけることができるような人材は、みな「ゴールト峡谷」に行ってしまった。繁栄を極めたニューヨークにすら大停電が起き、アメリカ合衆国は破滅の道をたどる。しかし、ゴールトたちにとって、このアメリカの破滅こそが、「彼らのアメリカ」建国の真の始まりだった。

以上が、『肩をすくめるアトラス』の物語内容である。

3. 『肩をすくめるアトラス』の多層性

アイン・ランド文学研究において、先駆的研究者であるミミ・レイセル・グラッドストーン(Mimi Reisel Gladstein)は、この小説には、「ミステリー」「サイエンス・フィクション」(以下SFと記す)「女性ファンタジー／フェミニズム寓話」「アーサー王風ロマンス」の四つのレベルがあると指摘した(Gladstein, 1999, 33-61)。

ミステリーであることは明らかだが、SFでもある理由のひとつは、この小説内で、ゴールトが開発したとされる「静的エネルギーを動力に転換し、鉄道の一車両の半分の大きさで一国の電力をすべて供給

できる夢のモーター」が登場したり、タグニーの恋人になる大鉄鋼会社を経営するハンク・リアーデン (Hank Rearden) が、鋼鉄よりも軽くて強い奇跡の合金リアーデン・メタルを発明したり、タグニーやリアーデンの良きビジネス・パートナーであるエリス・ワイアット (Ellis Wyatt) が枯渇した油田再生技術を開発したりするような、現在でも不可能な技術が登場するからである。

ただし、ランドは理工学系の専門的知識はなかったので、いかにも「空想科学小説」らしいリアルで説得力のある、かつ21世紀の読者をして、作家に「先見の明があった」と感心させるような類の事物や技術は想像できなかった。また、20世紀後半は飛行機などの空輸の時代であって鉄道は衰退するという事も予知できなかった。多忙なビジネス・ウーマンのヒロインに「携帯電話」を持たせることもなかった (Gladstein, 1999, 42-43)。

その意味で『肩をすくめるアトラス』に描かれる世界は、20世紀的前半的な鉄道や鋼鉄や石油に依存したセピア色の「懐かしい未来」である。それでもなおかつ、この小説が優れたSFであるのは、「国家と世界が、ある特定の実践と方向を採り続けるのならば、どうなるかをランドが仮定して書いた未来」 (Gladstein, 1999, 40) が描かれているからだ。

作品に輝かしい未来＝ユートピアが描かれようが、暗黒の未来＝ディストピアが描かれようが、SFは、多かれ少なかれ「現在」への批判、風刺を前提としている。現在の文脈では書けないことを、未来という架空の文脈で書くのがSFでもある。描かれる未来は作家が危惧する現在の反映か、もしくは陰画である。

『肩をすくめるアトラス』に描かれるのは、アルゼンチンも、チリも、英国も、フランスも、ドイツも、グアテマラも、インドも、メキシコも、ノルウェイも、ポルトガルも、トルコも「人民国家」 (People's State of...) と冠された共同的国家、社会主義国家となった世界である。その世界の潮流の中でアメリカ合衆国も経済システムを資本主義から社会主義へと変えていく世界である。全体の利益、世

界の利益のためという大義名分で、アメリカの生産する富が各国の人民国家に援助として流出する世界でもある。

『肩をすくめるアトラス』の構想・執筆期間 (40年代半ばから57年) は、冷戦が始まり、強化された時期である。ランドは、ソ連の国際社会における目覚ましい台頭と、東欧やアジア、中近東、南アメリカへの勢力拡大に対して、大きな恐怖を抱いていた。その恐怖が、革命後のロシアの混乱と困窮を経験した人間だけが持つ恐怖が、この小説には横溢している。

ただし、社会主義とか共産主義とか全体主義とかいう用語は、『肩をすくめるアトラス』には、いっさい使われていない。ロシアとかソ連とかソ連陣営の国の名前もいっさい言及されない。しかし、この小説が、アメリカ的個人主義／資本主義／自由競争と、ソ連的集団主義／社会主義／計画管理経済の対立を描いていることは明白である。この小説世界における善と正義は、前者にあることも明々白々である。

この意味において、『肩をすくめるアトラス』は、アメリカ的なものの正義と勝利を歌い上げる勧善懲悪「冷戦ミステリーメロドラマSF」である。ならば、『肩をすくめるアトラス』は、アメリカの国民文学であり、ランドはアメリカの国民作家である。国民作家の機能とは、その国民国家の正当性を保証し、その国家の維持と強化に貢献する作品を生産することである。国家を支える共同幻想を物語の形式で国民 (特に10代から20代の若い人々) に植えつけるのが国民文学である。

と同時に、この小説は、第二波フェミニズムが台頭する1960年代より早く、当時としては破天荒な英雄的ヒロインであるタグニーを造型した点において、フェミニズム小説の先駆でもある (Gladstein, 1999, 46-56)。ただし、ランド自身はフェミニズムに関心はなかったし、自分をフェミニストとして認識した形跡もいっさいない。ヒロインのタグニー造型について、ランドは可能ならばこうありたいと願う理想の女性像を、「自分自身からいっさいの欠点をとった理想の自分自身をヒロインにした」と述

べた (B. Branden, 1986, 225) .

ダグニーは、頭脳明晰なエンジニアでかつ大鉄道会社を実質的に経営し、疲れを知らない不屈の闘士であり、飛行機の操縦もできるが、容姿はあくまでも繊細優美であり、小説のヒーロー4人のうち3人から愛される。その3人の男たちとは、ゴルトとリアーデンと、ダグニーの幼友たちであり初恋の相手でもあった南アメリカの銅山を一手に所有する大財閥の若き当主フランシスコ・ダンコニア (Francisco d' Anconia) である。フランシスコは、ゴルトの大学時代の親友であり、ゴルトの新世界樹立計画に賛同し、政府に没収され国営化される前に、先祖代々の財産を故意に蕩尽し、鉱山を廃鉱にする。フランシスコは、ダグニーを愛しているが、新世界樹立計画を秘すために、彼女から遠ざかる。

このフランシスコやゴルトから愛されるばかりでなく、ダグニーは、妻のある鉄鋼王リアーデン (アンドリュウ・カーネギーがモデルと言われる) と不倫関係にもなる。とはいえ、その状態にいっさい屈託も罪悪感もない。社会的に窮地に陥ったリアーデンを救うために、ラジオ番組で正々堂々と臆することなく、リアーデンとの関係を公表し、スキャンダルを蹴飛ばす。また、ダグニーは祖父の代から彼女の家に仕えてきた一族の出身であり、かつ彼女の忠実な部下であるエディ・ウィラー (Eddie Willer) からも愛されている。まさに、ダグニーというヒロインには、女性の欲望や夢が臆面もなく全開したまま投影されている。

たとえ、このダグニー像が、「女装した男」や「前時代的ブルジョワ・リベラル・フェミニスト」にしか見えなくても、フェミニズム意識のある若い読者に、十全に生きる有能な積極的女性像や有効で力強いモデルを与えてきたこの小説の機能は認めるべきだ。大衆の欲望と夢の生成と維持に関与する大衆文学というメディアに、現実逃避装置として以外に、なにほどこかに社会に貢献する機能があるとすれば、そのひとつは、読者に対して生きる力を喚起するような魅力ある人間モデルを提供することだろう。

もちろん、こうした大衆文学の機能は諸刃の剣である。英雄的ヒロインが提示されても、女一般の現実が是正されるわけでもなく、現実逃避の夢想がまたひとつ増えるだけのこともかもしれない。しかし、フェミニズムの浸透には、ダグニーのような、女の力への確信を内面化させる強力なイメージが、文化的アイコンが、まだまだ必要だったのだ (Taylor, 247/ 藤森, 2001, 118-23) .

この小説に関して、指摘すべきもうひとつの重要な点は、この小説が文学の古典的枠組みを借用しているということである (Gladstein, 1999, 56-61) . ある傑出した英雄の傘下に志を同じくする英雄たちが集まり世の中を動かして行くという構図は、『三国志』や『水滸伝』や『南総里見八犬伝』など、中国人にも日本人にもなじみが深い。西洋人にとってのそれは古代英国を平定したとされるアーサー王と彼を取り巻く円卓の騎士の伝説である。グラッドストーンは、ゴルトをアーサー王 (King Arthur) として、リアーデンをランスロット (Lancelot) , ダグニーをアーサー王の妃でありランスロットの愛人でもあるグイネビア (Guinevere) にたとえている (Gladstein, 1999, 58-59) .

また、この小説の、志ある人々が、共同謀議のすえに、人跡未踏の地に新世界を樹立するというプロットは、アメリカ人の想像力に特徴的な「陰謀論的世界観」を刺激する (Martha F, 2011,) . 陰謀論的世界観とは、「世界は少数の権力者たちの共同謀議で動かされているのであって、議会などは隠れ蓑でしかない。民主主義が実現されたことなどない」という考え方である。

ただし、この小説においては、悪しき陰謀が、良き志による陰謀によって転覆されている。つまり、通常の陰謀論は、ダグニーの兄が加担しているような権力者共同謀議によって、一般市民や庶民の知らないところで物事が決定されているのであって、一般市民や庶民は、わけもわからず翻弄されるだけという発想をする。しかし、『肩をすくめるアトラス』においては、権力者の共同謀議に従属することを断固拒否して、有意の人々が、権力者共同謀議に

よって腐敗し弱体化していく国を棄て、密かに別世界を構築することに成功する。

アメリカには、ある種の非常に特権的な金融資本家や財閥が、自由市場の資本主義の原則を破り、政治家に献金するかわりに、自分の傘下にある企業に都合よい法律を制定させたりしているという（陰謀論的）仮説が、流通している。たとえば、石油メジャーであるスタンダード・オイル社を立ち上げたロックフェラー家が、石油から製造する医薬品を流通させるために、医学界を支配し、自然療法や伝統的な民間療法を非合法化したという説がある。石油由来の医薬品は副作用が多く、さらなる病気の原因でもあるし、そのような医学研究もあるが、そのような研究は、医学界、メディアを支配することによって、絶対に認められないようにして、研究者を社会的に抹殺するという説がある。病人が増えれば増えるほど、医薬業界には利益があるのだから、医学にも薬学にも「学問の自由はない」という説がある（Brown,1979,2010）。

そのようなアメリカの一般国民の心の底にある「権力者共同謀議」への疑惑に対して、『肩をすくめるアトラス』は、「政府や特権的人々を信じるな。彼らは、大義名分のもとに自由な社会、アメリカの建国の父たちが目指したような社会ではなく、一部の共産党員のみが特権を持ち、民主主義はないソ連のような社会を作ろうとしている。私たちは、黙って、こっそり彼らに抵抗するべきだ、私たちの社会を、この社会の裏側に構築しようではないか」と、訴えかけているのだ。

作品の底に、このようなメッセージがあると仮定することは、アメリカの精神風土においては、決して荒唐無稽ではない。2012年現在ならば、フリーメイソンリー（Freemasonry）だの、イルミナティ（Illuminati）だの、またエール大学の特権的フラタナティであるスカル&ボーンズ（Skull & Bones）だの、秘密結社が世界を動かしているという陰謀論史観は、日本でも珍しくはない。しかし、こうした世界観は、アメリカでは、かなり早くから浸透していた。それは、アメリカの文化が、多くの結社の相克、強調、離反によって政治的経済的様相が決定さ

れる「結社文化」であることから、導き出される世界観である。

「結社文化」はアメリカという国の大きな特徴のひとつである。フランスの政治思想家アレクシス・ド・トクヴィル（Alexis-Charles-Henri Clérel de Tocqueville:1805- 1859）は、すでに1835年に出版された『アメリカにおけるデモクラシー』第2部において、「合衆国の政治的結社について」という章（第4章）を設けて、「アメリカは世界中で結社をもっとも多く利用する国であり、この有力な行動手段をこのうえなく多様な目的のために使う国である」と指摘した（トクヴィル、松本訳、2005,38-50）。アメリカ独立革命そのものが、ジョージ・ワシントン（George Washington:1732-99）にせよ、トマス・ジェファソン（Thomas Jefferson:1743-1826）にせよ、ベンジャミン・フランクリン（Benjamin Franklin:1706-1790）にせよ、ジョージ・メイソン（George Mason:1725-1792）にせよ、フリーメイソンリー（Freemasonry）のメンバーであるフリーメイソン（freemason）が中心となって、成就させたことは、よく知られている。また、ジョージ・ワシントンの肖像画が絵柄であるアメリカの1ドル紙幣の裏側には、フリーメイソンリーのシンボルマークである「すべてを見通す目」（Eye of Providence）が印刷されていることも、よく知られた事実である。

明らかに、アイン・ランドには「結社」への志向がある。血縁でもなく地縁でもなく、ある目的、大義の実現のために結集することへの憧憬がある。ゲマインシャフトではなく、ゲゼルシャフトにこそ、人間の気概（美德）と有能さが発揮されると考えている。『肩をすくめるアトラス』に描かれる新世界こそ、究極のゲゼルシャフトではないか。

アイン・ランドは、『水源』においても、建築家ハワード・ロークとその仲間たちのありように、フリーメイソン（自由な石工）の連帯を重ねている。「建築家」とは、現代の石工である。ロシアのユダヤ系ブルジョワ家庭に生まれた彼女は、父か母の父親か、その他近い親族にフリーメイソンがいたはずである。しかし、このことについては信頼できる資

料がないので、ここでは示唆する程度にとどめておきたい。

ともあれ、こうしてみると、『肩をすくめるアトラス』が、「ゴミ古典」(trash classic)とか「思想小説のハーレクイン・ロマンス」と揶揄されながらも、1957年の出版以来、アメリカの国民文学として読まれ続けてきたことが納得できる。よくできたミステリーであり、かつ冷戦期のアメリカ人を支える国家幻想に強く関与した「冷戦メロドラマSF」であり、女性読者にとっては、英雄的ヒロインが大活躍する「女性用ファンタジー」であり、かつ伝統的文学の枠組みを活かした叙事詩的英雄物語でもあり、アメリカの「結社文化」から生まれた「陰謀史観」、もしくは「権力者共同謀議強迫観念」に訴える「権力者共同謀議を転覆させる陰謀小説」であるのだから。

とはいえ、上記の事柄のみが、『肩をすくめるアトラス』をして、アメリカの国民文学にさせたわけではない。この小説の真骨頂は、実は、草の根の読者に与えた自己啓発的影響力の大きさにある。ランドは、『肩をすくめるアトラス』の後書きに、「私の哲学は、本質的に、人間を英雄的存在として考える概念である。自らの生命の道徳的目的を自分自身の幸福とし、自らの最も高貴な行為を生産的達成とし、自らの唯一の絶対物を理性とする存在が私の人間という概念である」と記している(Rand, 1957, 1992, 1075)。つまり、アイン・ランドの哲学は、生きることを肯定し、人間を肯定し、人間の英雄性を寿ぐ「生の哲学」なのだ。だからこそ、読者の実人生に応用活用できる自己啓発的要素にも満ちていた。

次には、アイン・ランドが、『肩をすくめるアトラス』において展開した「私の哲学」であるところの「客観主義」(Objectivism)が、どのように「生の哲学」であるのかを確認する。その自己啓発的要素も確認する。

4. 「客観主義」について

「客観主義」は、形而上学的には客観的現実(Objective Reality)、認識論的には理性(Reason)、倫理的には自己利益(Self-interest)、政治的には自由放任資本主義(Laissez-faire Capitalism)の立場を採るといえるものである。以下は、『肩をすくめるアトラス』の根本にあるアイン・ランドの哲学「客観主義」(Objectivism)の内容を、筆者がまとめたものである。

(1) 人間は生き物である。生き物である以上は、生き延びることが目標である。だから、人間が生き延びることに益になるものは「善」であり、人間が生き延びるのに障害になるものは「悪」である。生き延びることに利益になることを求めなければならないという意味において、人間は利己的であらねばならない。一般的に言われる利己主義の意味は、「欲望のおもむくままに生きること」であるが、利己主義の本来の意味は「自己に利益があるようにすること」である。「欲望のおもむくままに行動すること」は自己利益に反するので、真の利己主義ではなく、単なる気まぐれである。

(2) 人間が生き延びるということは、どういうことか。現実には人間の思惑とは関係なく存在する客観的実体である。人間は、現実を認知し把握することができるが、それを創造することも変えることもできない。たとえば、人間が水を望んでも水は出現しない。水のある場所まで移動しなければならない。人間は植物ではないから、移動せずとも日光や土の中の栄養素を吸収して生き延びることはできない。獣のように本能の中に生き延びるための行動がプログラミングされているわけでもない。獣のように身体能力が高いわけでもない。人間の場合は、すべて学習しないと、生き延びることができない。脳の力、思考力だけが、人間の持つすべてだ。人間は、思考力によって、自分の欲望や願いだけでは変わらない現実に関与し

て、自らにとって価値あるものを獲得し生産することによって生き延びる。人間の英雄性は、このような生産性にある。

(3) 思考とは何か。人間の諸感覚が捉えた事物をそれと確認し (identify), 他の事物と関連付け統合する (integrate) 過程が思考である。この思考を稼働させる機能が理性 (reason) である。理性だけが、人間が客観物である世界に対処して生き抜く知識を獲得する手段であり、行動への適切な指針である。頭脳と身体を適切に使って現実に対処し、自分が生き延びるために利益になるものを入手できれば、その思考と行動は合理的であるということであり、それに失敗するのは思考と行動が合理的でなかったということである。思考と行動において合理性がないと、しかも長期的視野に基づいた合理性がないと、人間は生き延びることができない。

(4) したがって、信仰や感情を知識獲得の手段とする神秘主義や、確実な知識は人間には獲得不可能なものという懐疑主義は否定される。また、人間存在が、運命とか育ちとか遺伝子とか経済状況の犠牲者であるとする決定論も否定される。人間の生は、客観的実体である現実に対処して、生き延びることに利益になることを選択し実践するという合理的な思考と行動の蓄積であって、それ以外のものではない。

(5) そういう存在としての人間が、そういう存在としての人間と関わるということは、互いの合理的な思考と行動によって獲得した価値あるものを、合意の上で交換するという関係でなければならない。互惠の関係でなければならない。したがって、正しい人間関係は、すべて交易者、商人 (trader) の関係である。愛情関係や友情関係も、互いが生み出した価値の交換関係である。この意味において、「無償の愛」はありえない。「利他主義」はありえない。ありえない利他主義を推奨する人々は、他人が生み出した価値と交換

されるにふさわしい価値を生産し提供することなしに、他人が生み出した価値を手にしたいたかり屋か、搾取者か、寄生虫である。

(6) 右記のような人間の条件と人間関係のあり方を守ることが徳徳であるが、この徳徳の実践を擁護する経済体制は資本主義である。個人間の合意のうえでの交換関係、合理的な自己利益に基づく交換行為に干渉し規制する体制は邪悪である。したがって、自由放任資本主義が徳徳的経済体制である。ただし、資本主義はいまだ完全には実現されたことがない「未来のシステム」である。なぜならば、徳徳の実践の不足により、互惠の交換関係ではない、利他的な搾取関係は、いろいろな形で残っているからである。世界史上初めて、資本主義社会として建国されたアメリカ合衆国も、混合経済や経済統制をまぬがれていないからである。

(7) この徳徳の実践を擁護し、個人の生き延びる権利と、それに伴う所有権を保護する政治体制は、夜警国家である。合理的な思考と行動によって獲得した価値あるものに対する個人の所有権が守られないということは、人間の生そのものが冒瀆されることである。それらの個人の諸権利の侵害は、具体的には物理的強制力 (暴力) の行使によるので、政府は、物理的強制力 (暴力) の行使を抑止する物理的強制力 (暴力) を持たなければならない。その力の行使は、恣意的であってはいけない。個人の諸権利を侵害する暴力に報復し反撃するときのみ、力の行使がゆるされる。

(8) 物理的強制力からの脅威がなければ、生き延びるために合理的で長期的視野に基づいた自己利益のための活動に人々は専心できる。そのような人間で成立する自由な社会は発展し繁栄する。それ以外のことに政府が介入し規制することは、国民の合理的な思考と行動の自由な実践を抑圧する。ひいては、それらの自由な実践によって形成される自由で豊かな社会の発展を阻害する。統治

機関による規制は、その規制行為に従事する官僚組織の肥大を招き、税金公金浪費が増大する。そもそも、政府運営資金は、政府が提供するサービスに対する国民からの「自主的支払い」である（べきだ）。略奪者による物理的強制力を抑止する公的機関である裁判所と警察と軍の運営に対する「自主的支払い」である（べきだ）。国民の収入は政府や官僚の所有物ではない。「公」とは、政府や官僚組織の中のある個人の私物に転化する危険が常にある。政府や公的機関が、国民にとって最大の略奪者にならないように、最悪最強の暴力団にならないように、私人である個人の国民は常に警戒しなければならない。

この「客観主義」において、もっとも理解しにくいのは、「利他主義」の否定であろう。ランドの「利他主義」の理解は独特である。『肩をすくめるアトラス』に描かれる新世界、ゴールト峡谷のメンバーは、以下のことばを誓う。「私の人生と愛によって、私は誓う。私は決して他人のために生きることはなく、他人に私のために生きることを求めない」(“I SWEAR BY MY LIFE AND MY LOVE OF IT THAT I WILL NEVER LIVE FOR THE SAKE OF ANOTHER MAN, NOR ASK ANOTHER MAN TO LIVE FOR MINE.”) (Rand, 1957, 1992, 675) と。「利他主義」という伝統的に美德とされてきた行為を、伝統的に美德とされてきたという理由だけで、その本質を疑わず、機械的に自動的に他人の利益のために生きるのは、自分の利益のために生きることより尊いとする姿勢を、ランドは批判する。人間の最高の道徳的目的は自己のより良き生存なのだから、人間がまず自己の利益について考えるのは当然であり、それも、長期的視野に基づいた合理的な自己利益を図るのは人間の義務だと主張する。非合理的に短期的視野から自己利益を図ることは、結局は自己の不利益になる。つまりは、徹底した利己主義は、利他主義に通じる。そういう意味で、アイン・ランドは利他主義を否定し、利己主義を肯定した。しかし、このアイン・ランド流利己主義のすすめは、誤解や曲解にさらされやすいし、またさらされてきた。

「アイン・ランド流利己主義のすすめ」をさらに理解するために、また同時に、政府の介入や計画経済を許す修正資本主義ではなくて、古典的自由放任資本主義を、ランドが支持する理由を理解するために、主人公のひとりであるフランシスコが小説内で展開する「マネー論」を確認してみよう。彼は、「金 (money) が諸悪の根源」という通俗の見解に対してこう反論する。長いが引用してみる。

「あなたは、金の起源が何かとおたずねになりましたね。金とは交換の手段です。もし生産される物がなければ、人間が物を生産できなければ、存在しないのが交換です。他の人間と取り引きしたい人間が、交易によって取り引きするという行為、つまり価値ある物を得るために別の価値ある物を与えるという行為の原則の物質的形が金です。金は、たかり屋の道具ではありません。たかり屋は哀れっぽく泣いてあなたの生産物を所有することを主張します。金は、また略奪者の毒でもありません。略奪者、不正利得者は、あなたからあなたの生産物を力づくで取ります。金とは、生産する人間によってのみ可能にされるものです。これを、あなたは悪とおっしゃる？あなたが、あなたの努力への支払いとして金を受け取る時、他人の努力の生産物とその金を交換するという信念でのみ、そうするはずですよ。金に価値を置く人間ならば、たかり屋や略奪者ではありません。どれほどの大量の涙も、世界中からかき集めた銃すらも、あなたの財布にしまわれている紙を、あなたが明日生きるのに必要とするパンへと変換できません。その紙は、本来は金、ゴールドであるべきだったのですが、それは名誉の印です。あなたのその紙の所有権は、生産する人間のエネルギーに基づいたものだからです。あなたの財布は、あなたの回りの世界のどこかで金の起源である道徳的原則を踏みにじらない人々がいるという希望の表現です。これを、あなたは悪とおっしゃる？(中略)金は、あなたの生産物やあなたの努力ゆえに金を得ることを、あなたに許します。あなたの生産物やあなたの努力がそれを買う人間にとって価

値があるという条件でならば、それ以外は駄目です。交換しあう者同士の強制されない自主的な判断による相互利益を持つ人々以外には、金は取り引きを認めません。人間は、自分自身の利益のために働かねばならないという認識を金はあなたに要求します。自分自身を傷つけるためではないのですよ。人間は自分が獲得するために働くのです。自分が損をするためではないのですよ。自分は重荷を背負う獣ではないし、惨めさを背負うために生まれたのではないという認識、人間には価値ある物を与えなければならないという認識、人間の共通の絆は苦しみとの交換ではなくて、物の交換だという認識を金は要求します。他人の愚かさへあなたの弱さを売るのはではなくて、他人の理性にあなたの才能を売ることが、金は要求します。あなたが他人が提供するまやかしいものではなくて、あなたの金が見つけれられる最上の物を買うことを、金は要求します。人々が交易で生きるとき—最終的な働きかけとしては、理性によって、決して強制ではなく—勝利をおさめるのは最高の生産物です。最高の行為です。最高の判断と最高の能力をもった人間です。ひとりの人間の生産性の程度とはその人間が獲得する報酬の程度です。これが、人間の存在の掟であって、その道具と象徴が金なのです。これがあなたが悪とお考えになるものでしょうか？」(Rand, 1957, 1992, 382-83)

都市や国が交換、交易のための市(いち)を中心に発展したものであることは歴史的事実であり、金(かね)は、本来の起源の「市」での物々交換から、商品と商品の交換の媒介物として発明された。それは画期的な発明であった。人間が自らの努力と知恵の結晶であるものを、他人の努力と知恵の結晶と相互に納得して交換する行為を、より便利なものにするために発明された金は、したがって当然、人間の知恵と努力の象徴でもある。

このフランシスコの「マネー論」によれば、金が汚いのではない、金が諸悪の根源なのではない。その「人間の知恵と努力の象徴」である金を、「自分

の努力と知恵」と均衡した交換によってではなく、たかりや搾取や略奪によって獲得しようとする意志や行為が汚いのである。たかりや搾取や略奪という行為が悪なのである。他人の努力や知恵を、自分のそれと均衡した(等価)交換で得るのではない行為が悪なのである。利他主義は、こうした搾取の別名なのである。

利他主義は、一見きわめて美しい行為に見えるが、自らの努力と知恵の産物を、他者の努力と知恵の産物と交換させるという公平な交易ではない、という意味において、他人からの自分への搾取を許すという意味において、自己を冒涇することになる。同時に、それは、自己の努力と知恵を冒涇することであり、自己否定であり、自己の生命の否定なのだ。またそれは、他者の否定にも通じる。他者の努力や知恵の産物を正当で均衡した報酬を提供することなく利用することを、自らに許してしまう行為であるからだ。

この意味で、社会福祉や慈善は、ランドの小説においては、搾取と略奪の偽装であり、結局は寄生的人間を許す悪なのである。この観点から社会主義国家の「能力に応じて、必要に応じて」(カール・マルクスの『共産党宣言』の有名な文句)というシステムは、悪であり、人間の尊厳への冒涇なのである。だから、ランドは自由放任資本主義を支持する。

アイン・ランドは、自分はアリストテレス(Aristotle: BC384-322)の哲学から大きく影響を受けていると述べた(Rand, 1999, 6-)。確かに、アイン・ランドの思想の根本には、アリストテレスが『ニコマコス倫理学』で論じた「均衡」(equilibrium)の概念がある。Aが生産した価値あるものは、Bが生産した価値あるものと同等の価値があると、Aが判断すれば、AとBの間には、それぞれが生産したものを交換するという交易が成り立つ。フェアなビジネスとは、そのような交易の発展的相似形でなければならない、人間関係も、そのような公平な交易であらねばならない、というアイン・ランドの発想の根本には、「均衡している状態

が正義である」という前提がある。しかし、この見解の形而上学的意味を探求するのは、今の段階では、筆者の力を超えているので、本論では、アリストテレスとランドの関連についてのみ言及するにとどめておく。

アイン・ランドの哲学的起源の問題はさておき、アイン・ランドの哲学は、自己啓発的認識を読者に与える。その認識は、以下のようにまとめることができる。

- (1) 「哲学する」ことと「現実の中で生きる」ことは両立する。
- (2) 利己主義は正しい。自分の利益を考えることは正当なことである。
- (3) 理性とは利性であり、合理性とは合利性である。長期的視野に基づいた合理的な損得を考えることが、合理的ということである。
- (4) 「無償の愛」は神話である。互惠関係が人間関係の基本である。
- (5) 利他主義の賞揚は、略奪者や搾取者の常套であるから、用心せよ。
- (6) 個人が、長期的視野に基づいた合理（利）的エゴイズムに基づいて活動すれば、社会は個人の集まりであるのだから、自由で豊かな社会が形成される。
- (7) 「あなたが国のために何ができるかと問え」などと政府が国民に要求することなど僭越であり、権利の侵害であり、あくまでも私人の個人の国民に主体がある。
- (8) 何よりも、人間が生き延びること、そのものが善であり、目標であり、価値である。

『肩をすくめるアトラス』は、多層的な読み方ができるエンターテインメントであると同時に、生きるのに糧となる「自己啓発本」でもあるのだから、この小説が、アメリカにおいて、草の根の読者の国民文学となったのも、不思議ではない。

とはいえ、『肩をすくめるアトラス』のアメリカにおける国民文学化は、必ずしも、この小説そのものが生んだ「100パーセント自然現象」ではないと

いうことも指摘しておかなければならない。

アイン・ランドの死後、ランドの遺稿管理人となったランドの弟子であったレオナルド・ピーコフ（Leonard Peikoff:1933-）は、1985年に「アイン・ランド研究所」（The Ayn Rand Institute）を立ち上げ、師の作品が読まれ続けるように対策をたてた。たとえば、高校の国語（English）のクラスで、全員が課題図書として読めるように、『水源』（The Fountainhead,1943）と並び、『肩をすくめるアトラス』を教育予算が乏しい州の高校に寄贈し続けている。クラス全員の生徒が読めるような冊数を寄贈することによって、高校生が、授業の一環として、アイン・ランドの小説を読むような機会を創出し続けてきている。さらに、それらのランドの小説に関するエッセイ・コンテストを実施し、優秀なエッセイを書いた高校生や大学生に奨学金を提供している。こうして、「アイン・ランド研究所」は、アイン・ランド読者数を確保してきた。

ある文学作品が長く読まれ続けていく理由は、ふたつある。ひとつは、その作品が「ブランド」となることである。既成の権威からの「お墨付き」を得ることである。たとえば、英語で書かれた作品ならば、大学の英文科で読まれ論じられることである。もうひとつの理由は、その作品の面白さが多くの人々によって伝えられること、および、その状態が継続することである。

しかし、アイン・ランドの小説は、大学の英文科の教室で読まれたり、論じられたりすることはなかった。ランドの提唱する人間観と20世紀のアカデミズムが獲得した人間観とは、相いれないものだった。「事実はない、あるのは解釈だけ」と言った近代相対主義の父と言われるニーチェや、フロイトの精神分析やアインシュタインの相対性理論やマルクス経済学の影響は言うにおよばず、特に60年代以降、フランスからアメリカに輸入された記号論や構造主義や脱構築理論などのポスト・モダニズム思想は、人間存在の自立性を解体した。人間の欲望は他者の欲望であり、人間の自我は社会的に歴史的に構築されたものであり、主体も自由意志も幻想という認識が、アカデミズムを支配した。アカデミズ

ムからすれば、ランドの思想は素朴すぎる実在論であり、時代錯誤の英雄主義であり、危険な超人思想であり、その意味で知的な考察に価しない粗雑で幼稚な大衆思想なのだ。

また、アカデミズムの中でも埋もれた女性作家の再評価作業を精力的にしてきたフェミニズム批評からも、ランドは無視された。それは、アメリカのアカデミック・フェミニズムの政治的立場が民主党系ラディカル左派に属し、マイノリティ擁護、弱者救済の高福祉社会をめざす「大きな政府」支持者であることから来ている (Gladstein, 2000,51/Taylor, 1999, 241-45/N. Branden, 1989, 226-27/McElroy, 1999,155-56)。

こうした「既成フェミニズム」(establishment feminism)の政治的立場は、ランド説くところの集団主義や利他主義批判とあい入れるはずがなかった。ランドの造型した英雄的ヒロインも、時代遅れの「西洋／白人中心主義ブルジョワ・フェミニズム」の産物であり、階級や人種やエスニシティを視野に入れて久しいアカデミック・フェミニズムの枠組みには、ランドが入る余地がなかった。

したがって、アイン・ランドが読まれ続けるには、アカデミズムや知識人の支持によるブランド化ではなく、「その作品の面白さが多くの人々によって伝えられること、および、その状態が継続すること」が必要だった。それを実現させる手段が、高校での課題図書となることだった。そうすれば、世代から世代へ読者を生産できる。世代から世代へと、作品の面白さが口伝えに知らされてゆく。「アイン・ランド研究所」の戦略は、今までのところ成功している。

以上のように、アイン・ランドの思想と、『肩をすくめるアトラス』のアメリカの国民文学としての相と、「アイン・ランド研究所」の戦略が確認された。いよいよ、これで、アメリカの保守主義とリバータリアニズムと、アイン・ランドの思想の相克について論じる準備ができたことになる。

参考文献

- Bernstein, Andrew, 2008. *Objectivism in One Lesson: An Introduction to the Philosophy of Ayn Rand*. Lanham: Hamilton Books.
- Binswanger, Harry ed, 1986. *The Ayn Rand Lexicon: Objectivism from A to Z*. New York: New American Library.
- Branden, Barbara, 1986. *The Passion of Ayn Rand*.
- Branden, Nathaniel, 1989. *My Years with Ayn Rand*. San Francisco: Jossey-Bass Publishers.
- Britting, Jeff, 2004. *Ayn Rand*. New York: Overlook Duckworth.
- Brown, E. Richard, 1979. *Rockefeller Medicine Men : Medicine and Capitalism in America*. Memphis : General Books, 2010.
- Burns, Jennifer, 2009. *Goddess of the Market: Any Rand and the American Right*. New York: Oxford University Press.
- Engdhal, William F, 2007. *Seeds of Destruction: The Hidden Agenda of Genetic Manipulation*, Center for Research on Globalization. ウィリアム・イングドール著、為清勝彦訳 『マネー・ハンドラーロックフェラーの完全支配 アグリスティールカル(食糧・医薬)編』 徳間書店, 2010.
- Gladstein, Mimi Reisel, 1999. "Ayn Rand and Feminism: An Unlikely Alliance." Mimi Reisel Gladstein & Chris Matthew Sciabarra ed. *Feminist Interpretations of Ayn Rand*. Pennsylvania State University Press, 47-55.
- , 2000. *Atlas Shrugged: Manifesto of the Mind*. New York: Twayne Publishers.
- Heller, Anne C, 2009. *Any Rand and the World She Made*. New York: Man A Talese, Doubleday.
- Kelly, David, 2000. *The Contested Legacy of Ayn Rand*. New Brunswick: Transaction Publishers.
- Knight, Peter, 2000. *Conspiracy Culture :From Kennedy to the X Files*. London: Routledge.
- Koontz, Dean R, 1981. *How to Write Best Selling Fiction*.

- Cincinnati: Writer's Digest Books.
- Lee, Martha F, 2011. *Conspiracy Rising: Conspiracy Thinking and American Public Life*. Santa Barbara: Praeger.
- McElroy, Wendy, 1999. "Looking Through a Paradigm Darkly." Mimi Reisel Gladstein & Chris Matthew Sciabarra ed. *Feminist Interpretations of Ayn Rand*. Pennsylvania State University Press, 47-55.
- Mayhew, Robert, 2005. *Ayn Rand and Song of Russia: Communism and Anti-Communism in 1940s Hollywood*. Lanham Acarecrow Press.
- Rand, Ayn, 1936, *We the Living*. New York : Macmillan, New York: New American Library, 1996.
- , 1936, *Night of January 16th*. New York: Longman, Green, Paperback: New York: World Publishing Co., 1968. New York: New American Library, 1971. New York: Plume, 1987.
- , 1943. *The Fountainhead*. Indianapolis: Bobbs-Merrill, New York: New American Library, 1993. アイン・ランド著, 藤森かよこ訳『水源』ビジネス社, 2004.
- , 1946. *Anthem*. Los Angeles: Pampheteers, Inc., New York: New American Library, 1995.
- , 1957. *Atlas Shrugged*. New York: Random House, New York: New American Library, 1992. アイン・ランド著, 脇坂あゆみ訳『肩をすくめるアトラス』ビジネス社, 2004.
- , 1984. *The Early Ayn Rand: A Selection from Her Unpublished Fiction*. Ed. Leonard Peikoff. New York: New American Library.
- , 1961. *For the New Intellectual: The Philosophy of Ayn Rand*. New York : New American Library.
- , 1964. *The Virtue of Selfishness: A New Concept of Egoism*. New York: New American Library. アイン・ランド著, 藤森かよこ訳『利己主義という気概』ビジネス社, 2008.
- , 1967. *Capitalism: The Unknown Ideal*. New York: New American Library.
- , 1971. *The New Left: The Anti-Industrial Revolution*. New York: New American Library, 1975
- , 1984. *Philosophy: Who Needs It*. Bobbs-Merrill, 1982. New York: New American Library.
- , 1991. *The Ayn Rand Column*. New Milford: Second Renaissance Book.
- , 1999. *The Voice of Reason: Essays in Objectivist Thought*. New York: Meridian.
- , 1997. *Letters of Ayn Rand*. Ed. Michael S. Berliner. New York. Plume.
- , 1999. *The Ayn Rand Reader*. Ed. Gary Hull and Leonard Peikoff. New York: Plume.
- , 1999. *Journals of Ayn Rand*. Ed. David Harriman. New York : Plume.
- Sciabarra, Chris Matthew, 1995. *Ayn Rand, the Russian Radical*. University Park: Pennsylvania State University Press.
- Taylor, Joan Kennedy, 1999. "Ayn Rand and the Concept of Feminism: A Reclamation." Mimi Reisel Gladstein & Chris Matthew Sciabarra ed. *Feminist Interpretations of Ayn Rand*. Pennsylvania State University Press, 231-49.
- Younkins, Edward W. "Aristotle: Ayn Rand's Acknowledged Teacher" http://rebirthofreason.com/Articles/Younkins/Aristotle_Ayn_Rands_Acknowledged_Teacher.shtml
- Weiss, Bary, 2012. *Ayn Rand Nation: The Hidden Struggle for American Soul*. New York: St. Martin Press.
- アリストテレス著, 高田三郎訳, 1971. 『ニコマコス倫理学』岩波文庫.
- 鴨川光, 2009. 「アリストテレス著『ニコマコス倫理学』—エウイリブリアム, 「中庸」の思想」(1) ~ (3) ウェブサイト「副島隆彦の論文教室」 <http://soejimaronbun.sakura.ne.jp/files/ronbun001.html>
- 副島隆彦, 1999. 『世界覇権国アメリカを動かす政治家と知識人たち』講談社.
- トクヴィル, アレクシス・ド著, 松本礼二訳, 2005.

『アメリカのデモクラシー』第一巻（下）

岩波文庫.

藤森かよこ, 2001. 「危険なフェミニストの冷戦ナラティヴ---アイン・ランドの『水源』」 山下昇編著『冷戦とアメリカ文学---21世紀からの再検証』世界思想社, 100-25.

-----, 2001. 「アメリカ国民作家になったロシア亡命移民女性---アイン・ランドの『肩をすくめるアトラス』」 『桃山学院大学・国際文化論集』第24号, 47-79.

-----, 2005. 「儲ける<女>---Atlas Shruggedが寿ぐ美德の産物としての貨幣」 『英語青年』第151巻第8号 (研究社), 463-465

-----, 2008. 「アイン・ランドの資本主義観:反ビジネス文学風土の中でビジネスマンを祝福したAtlas Shrugged」 『桃山学院大学・人間科学論集』第35号, 219-249.

-----, 2012. 「アメリカにおける保守主義の誕生とアイン・ランドの交点」 『都市経営』(福山市立大学) 1号, 5-20.

脇坂あゆみ, 2010. 「アイン・ランドの思想と作品」 WePublish.(電子ブック)

Ayn Rand's Objectivism and *Atlas Shrugged*

Kayoko FUJIMORI

Atlas Shrugged (1957) was based on Rand's philosophy "Objectivism." In metaphysics, Rand supported philosophical realism, and opposed any kind of mysticism or supernaturalism, including all forms of religion. In epistemology, she considered all knowledge to be based on sense perception. She rejected all claims of non-perceptual or a priori knowledge, including instinct, intuition and revelation. In ethics, Rand advocated rational egoism, rational self-interest on a long-term vision.

Rand said that the individual should exist for his/her own sake, neither sacrificing himself/herself to others nor sacrificing others to himself/herself. She condemned altruism as incompatible with the requirements of human life and happiness. Rand's political philosophy emphasized individual rights including property rights. She considered laissez-faire capitalism the only moral social system. She opposed statism, absolute monarchy, Nazism, fascism, communism, democratic socialism, and dictatorship. She believed that rights should be enforced by a constitutionally limited government.

Rand acknowledged that Aristotle greatly influenced on her philosophy. Even though Rand's philosophy seems radically iconoclastic and out-of-dated, against modern and postmodern thoughts, American people after the middle of the 20th century have been greatly influenced by Rand's novels and Objectivism which have offered them self-developing guidelines and insights, as well as a certain political vision.

Keywords : Objectivism, reason, egoism, altruism, capitalism